

Ⅵ 総 括

遺跡は、標高13～30m、現在の山田湾から北西側に直線距離約0.8kmに位置する。調査区の微地形は、A区低地部（標高13～20m）・B区谷部（標高20～25m）・C区尾根部（標高25～30m）に大別され、大きく南側に向かって開けた地形である（第5・6図）。そして、集落は低地部に形成され、鉄生産関連遺構は北東谷部に形成されるなど、各時代の遺構の分布は、ある程度まとまりがある。

確認された主な遺構は、縄文時代前期・中期の竪穴住居跡・土坑から構成される集落跡、古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居跡から構成される集落跡、平安時代後期の工房跡・炉跡・炭窯跡から構成される鉄生産関連遺構群、中世の竪穴建物跡である。主な遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土製品、石器、石製品、金属製品、銭貨、炉壁、鉄滓類、動物遺存体、植物遺存体、自然遺物などがある。以下、主体となる縄文時代、古代、中世の各時代の遺構と遺物について、調査成果をまとめる。

1 縄文時代

(1) 遺 構

竪穴住居跡98棟、土坑112基（そのうち断面形フラスコ状・ピーカ状の土坑91基）を確認した。以下、遺構・遺物の数量が多かった前期と中期に分けて、特徴をまとめる。

a. 縄文時代前期（第562図）

竪穴住居跡

竪穴住居跡24棟を確認した。一辺が直線的な長方形や楕円形を呈し、壁溝と柱穴が壁際に配置される大型住居跡である。炉は地床炉で、大型住居跡の長軸方向の中心線に沿って連なるように形成される。近接する沢田Ⅰ遺跡では、埋土中に十和田中振テフラを伴い、壁際に小柱穴が配置される方形基調の小型の竪穴住居跡が確認され、時期は前期前葉（大木2式）を中心とする時期と考えられている（註1）。沢田Ⅲ遺跡では、同様の形態と時期の竪穴住居跡は確認できておらず、前期後葉の竪穴住居跡が多い傾向がある。

集落

前期の集落は、大型住居跡数棟から構成されていたと推測されるが、同地点に中期の集落が形成された故、前期の遺構の遺存状況は良くない。そのため、竪穴住居跡の環状・並列などの配置の別は明確に把握することができない。留意したいのは、前期の土器の大半が谷部で出土しており、前期の竪穴住居跡の多くは、より標高の低い低地部で確認されたことである。上位面の集落と下位面の捨て場となることが多い通常の遺構の位置関係からすると、谷部で確認した前期の遺物包含層の由来は、谷部北側の高位面（調査区域外）にも前期の集落が存在する可能性を残している。

b. 縄文時代中期（第563・564・565・566・567図）

竪穴住居跡

竪穴住居跡74棟を確認した。重複が多く、全体の状況を把握できない竪穴住居跡も多いが、平面形は、大きさの大小にかかわらず、円形や多角形を呈するものが多い傾向がある。時期は、中葉・後葉と微増し、中期末葉に数量が増加する。中期末葉では、規模の大きな竪穴住居跡と小さな竪穴住居跡がみられ、両者が集落が構成されていたようである。炉の形態は、石囲炉・土器埋設炉・複式炉など多様で、炉の位置は竪穴住居跡の中心より一方の壁際に寄る事例が多い。中期中葉では石囲炉があ

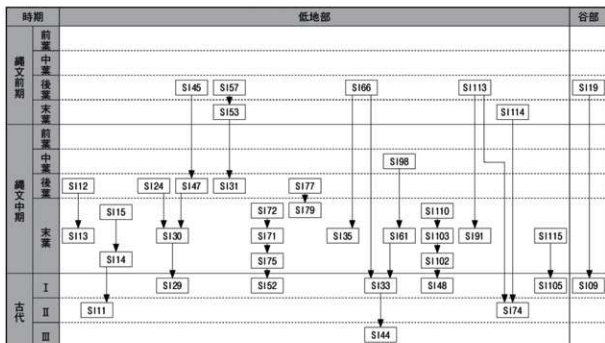
り、その後、石囲炉に掘り込み部（前庭部）が付いて、石囲炉と掘り込み部からなる複式炉、さらに土器埋設炉を伴う大型の複式炉へと変遷する傾向がある。複式炉には、土器埋設炉を伴ういわゆる複式炉（土器埋設炉+掘り込み部：C類、土器埋設石囲炉+掘り込み部：D類）と、土器埋設炉を伴わない複式炉系列の炉（石囲炉+掘り込み部：A類、地床炉+石囲炉+掘り込み部：B類）があり、量的には複式炉系列の炉が多い傾向がみられる。土器埋設炉の埋設方法には、斜位と正位があり、土器埋設炉は正位で土器埋設石囲炉は斜位埋設である。正位の埋設土器では、底部を欠く、胴部が使用された土器（31/S I 12、295/S I 37、786/S I 99）、口縁から胴部上半を埋設して使用した土器（45/S I 13）がある。斜位埋設土器では、上半部が斜めに欠損している（548/S I 68）。また、比較的規模が大きな竪穴住居跡では、炉が設置される位置の反対側の床面に小規模な複数の焼土遺構が確認できた事例（S I 13・75・102）がある。規模の大きな竪穴住居跡で炉の位置が一方の壁際に寄る場合の空間利用の在り方を類推できる事例である。柱配置は、竪穴内の炉を通る中軸線を挟んで対称に設けられる事例が数例確認できる。焼失住居と推定されたS I 103竪穴住居跡の炭粒を顕著に含む層の上に焼土やブロック土を顕著に含む層が認められる堆積状況は、戸町御所野遺跡で検出された土屋根と推定されている竪穴住居跡と類似し、当住居も土屋根の可能性が考えられる（註2）。

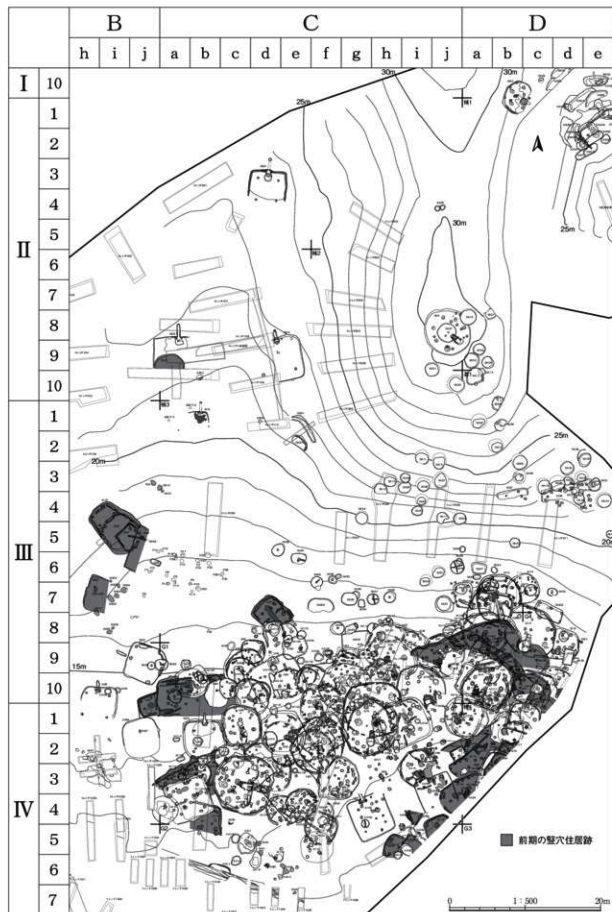
次に土器や石製品の出土状況から、竪穴住居跡内の空間利用の在り方を概観する。S I 60竪穴住居跡では炉と反対側の奥壁側の中軸線上の壁溝近くで倒立の埋設土器（460）が出土した。S I 101竪穴住居跡では炉の反対側の奥壁側の中軸線付近で埋設土器（791）が出土した。S I 12竪穴住居内では、炉の反対側の奥側床面の中軸線上で土器（32）が倒立で出土した。S I 13竪穴住居跡では、炉と反対側の奥壁左側の壁に立てかけられた状態で石棒（5701）が出土した。S I 104竪穴住居跡からは、炉と反対側の奥壁側の中軸線上の床面で、円礫2個（5813・5814）が並んで出土した。

同様の事例は、戸町御所野遺跡の縄文時代中期の竪穴住居で、炉の奥壁左側の壁際に石棒が立てかけられ、その上に花崗岩が横たわり、さらに床面に三角形を呈する板状の花崗岩が直立し、その周辺からも特殊な遺物が出土する事例が報告され、奥壁の左寄りを祭祀の場としていた可能性が高いこ

第44表 竪穴住居跡の新旧関係表

※主要な遺構について掲載

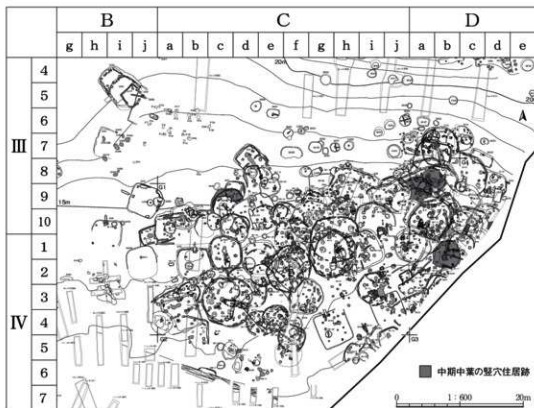




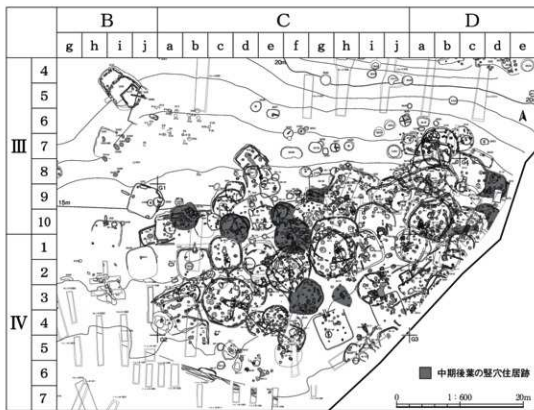
第562図 縄文時代前期の遺構分布図



第563図 縄文時代中期の遺構分布図



縄文時代中期中葉の竪穴住居跡



縄文時代中期後葉の竪穴住居跡

第564図 縄文時代中期の竪穴住居跡分布図(1)